

## 平成26年度 各種調査結果等を活用した学力向上の取組事例

事務所名	盛岡	学校名	矢巾町立矢巾中学校	TEL	019-697-3164
------	----	-----	-----------	-----	--------------

### すべての生徒に分かる喜びを実感させる指導の工夫

#### 【ねらい】

- ユニバーサル・デザインを取り入れた授業改善を行い、すべての生徒に分かる喜びを実感させる授業づくりを推進する。
- すべての生徒に分かる喜びを実感させることで自己肯定感を高め、どの生徒も生き生きと生活できる学校集団づくりを推進する。



#### 【具体的な取組】

##### 1 各種調査の分析

###### (1) H26年度岩手県学習定着度状況調査結果の分析（1、2年生の実態）

1年生の正答率は、国語が県平均より0.3ポイント低く、数学は1.6ポイント高くなっている。得点分布では上位の生徒も多いが、下位の生徒も多く存在した。

2年生の正答率は、5教科いずれにおいても県平均を5ポイント程度上回っていた。分布をみると、下位生徒が少なく、このことが平均正答率を高くしていると考えられる。

質問紙調査の「授業の内容がよく分かるか」という質問に、「よく分かる」「まあ分かる」と答えた1年生の割合は、県平均比-3～+7ポイントで、各教科、県平均とほぼ同じ傾向であった。

2年生は県と比べると教科のばらつきが大きく、県平均比-15～+16ポイントの範囲に広がっている。

###### (2) H26年度全国学力調査結果の分析（3年生の実態）

数学Aの平均正答率は全国平均より0.2ポイント高く、数学Bでは全国平均より3.5ポイント高くなっている。「授業の内容がよく分かる」「まあ分かる」と答えた生徒の割合は70.6%で、県平均より3ポイント高く、全国平均より0.9ポイント低かった。

国語の平均正答率は、A問題、B問題共に全国平均より4.4ポイント高くなっている。「授業の内容がよく分かる」「まあ分かる」と答えた割合は58.8%で、県平均より16ポイント、全国平均より13.2ポイント低かった。



###### (3) 分析から見えた課題

正答率をみると、1年生はほぼ県平均並みであったが、2・3年生は県平均を大きく上回っていた。

しかしながら、2・3年生で「授業の内容が分かる」と答えた生徒の割合は、それほど高い値を示さず、県平均と比べて下回る教科もあった。

このことから、本校の生徒は、授業の中で「分かった」と実感できる機会が不足していることが考えられる。下位の生徒も含めた全ての生徒が「分かった」「できた」と実

感できる機会を増やし、本校生徒の自己肯定感や自己効力感を高めていく必要があると考えられる。

## 2 授業改善の取組

### (1) ユニバーサル・デザインを取り入れた授業改善

生徒が学習する際に、どういった所でつまづくのか、自分の授業を見直し、どの生徒も意欲的に学習に取り組めるよう授業改善することを、今年度の校内研究のテーマとし、全職員で取り組んでいる。(平成27年度学校公開予定)

「視覚化」「共有化」「焦点化」等をキーワードに、授業の工夫を図っているが、学習の遅れがちな生徒への配慮は、結局、どの生徒にも学習し易い授業となっている。



### (2) 1人1授業公開

年に1回、それぞれ教師が、都合のいい時期に、A4版1枚の学習指導略案を作成し、授業を公開している。他の先生方は、それぞれの都合に応じ、短時間でもいいので参観に行く。

授業後に研究会は行わず、参観者が感想・改善点を文書でまとめ研究主任に渡し、研究主任はそれらを通信にまとめ、全職員で共有している。全教員で「分かる授業」の構築を目指している。

### (3) 町内各小・中学校との共通実践

算数・数学科では、町内各小・中学校で、独自に作成した単元テストを共通実施し、定着度の把握を行い補充指導を行っている。小学校段階から系統的に児童生徒の実態を把握することができ、効果的な指導ができています。(矢巾町単元テストについては本校または町教育委員会に問い合わせのこと)

英語科では長文問題を共通実践したり、英語検定への取組を協力して実施したり、情報交換を密に図りながら生徒の学力向上に当たっている。

### (4) 町内各小・中学校との授業交流

町教育研究所の研究に合わせ、数学科、英語科で町内各校間で授業交流を実践している。

共通の研究課題の下、研究授業を行い、数学では小・中間で、英語では矢巾中・矢巾北中の2校間で授業を参観しあっている。

参観回数の確保を優先するために、研究会は実施せず、授業後に感想等まとめたレポートを授業者に渡し、授業改善に役立ててもらっている。



## 3 授業外での取組

### (1) 全校学習クラスマッチコンクールの取組

学習クラスマッチという取組を年3回実施している。全学級が漢字・計算・英単語のテストの平均点を

競い、個人には満点賞が表彰される。テストは、予め公開された漢字・計算・英単語の問題 70 問の中から 50 問が出題され、全学級で朝自習や帰りの会に練習したり、家庭学習で取り組んだりしている。

問題が公開された 5 日後にプレテストを行う。この結果が基準点以下だった生徒には、始業前に開設する補充学習のための「オープン教室」への参加を促している。この「オープン教室」が、普段の授業で遅れがちな下位層の生徒に対する「教えて、ほめる」機会となっている。



## (2) 家庭学習、補習等の取組

家庭学習については、生徒の自主学習でなく、教師が家庭学習に課題プリントを出し、1週間で5教科全てに取り組むようにさせている。長期休業や昼休み、放課後を利用して、学習の遅れがちな生徒への補習も行っている。

部活引退後の3年生には、町の予算で、大学生による放課後学習会を実施している。年齢の近い大学生が勉強を丁寧に教えてくれ、好評である。

## 4 個に応じた取組

### (1) 特別支援学級での取組

特別支援学級の生徒については、一人ひとり個別の時間割を組んでいる。毎日の時間割の中で、交流学級で受けた方がよい時間と特別支援学級で受けた方がよい時間を個に応じた組み、学力の伸長を図っている。

### (2) サポートルームでの取組

不登校傾向の生徒については、町費支援員をコーディネーターにしながら、別室（サポートルーム）を設け、独自の時間割を組み、学力保障を行っている。「登校すればよい」の段階から、さらに、登校することの意義を感じさせながら、教室への復帰を目標に取り組んでいる。

## 【成果】

- 「分かる」授業を心がけ、授業力の向上を目指しているが、具体的な目標、具体的な方法のもと、校内研究が活性化され、授業改善が着実に図られている。
- 諸調査の結果から、「学習が大切である」「授業がよく分かる」生徒の割合が8割を超え、良好な結果がうかがえる
- 学力調査の結果から全体平均も県平均を上回っており、良い成果がみられる。得点分布をみても下位の生徒が少なく、良い成果がみられる。

